



Q. 総入場者数についての所感は

- WOMEN が大きく伸びた。デンソーエアービーズと組んで女子プロジェクトを実施しており1年間で約2倍入場者数が増加した。他にも招待券を多く配布して伸ばしているところもあれば、我慢して伸びは小さくとも中身を充実させたりなどチームによって施策方法は異なる。クラブが切磋琢磨しながら入場者数を伸ばしている。例えば、SAGA 久光スプリングスは佐賀県に移転してまだ3シーズン目。ようやくSAGA 久光スプリングスが佐賀県内で定着してきた。SAGA アリーナの良さや安定した興行、演出など一定の評価を受けている。こういったことの積み重ねだと考えている。PFU ブルーキャッツ石川かほくは入場者数自体の伸びは大きくないが、大雪など天候の問題で集客が難しい場面等もありながらも尻上がりに入場者数を伸ばした。シーズン終盤には会場前に長蛇の列ができるほどになっていた。周辺住民が4万人ほどの場所でも1つの文化、コンテンツとなっていると感じる。タツダオ・ヌクジャン選手やバルデス メリーサ選手、松井珠己選手などの活躍を含め戦術的に素晴らしかったのではと想定される。街の宝になっていくなど、そういったチームが出てきたことは大きい。MEN に関しては、WOMEN より早く事業化したクラブが多く、アリーナの確保の仕方など、少しずつ長けてきた結果だと考えている。

Q. タイ公式戦のカーディングでクインシーズ刈谷となった理由は

- まずチームから立候補をしていただき、その中でどのチームが良いのかを(理事会で)決めていった。刈谷にはタイ国内で知名度のあるヌットサラ・トムコム選手が所属していること、さらにヌットサラ選手自身がタイの興行に関して意欲を見せてくれたこと、責任企業のトヨタ車体もぜひということもあり最終的に選出した。

Q. タイ公式戦のカーディングでヴォレアス北海道となった理由は

- 池田憲士郎社長が自らタイでの興行に挑戦したいと手を挙げた。タイで試合を見てもらってタイの方々に旭川へ来ていただきたいなどさまざまなお考えを持っている。

Q. ヴォレアス北海道は海外への意欲が高いということか

- パートナー獲得のことなど、色々な戦略をお持ちなのではと思っている。

Q. タイ公式戦の主管はリーグかホームクラブか

- 主催、主管はリーグ。(クラブ意向も踏まえ)SAGA 久光スプリングス、大阪ブルテオンのホーム扱いとなる。2025-26シーズンの開幕戦をサントリーサンバーズ大阪のホーム扱いとして実施したと同じことである。

Q. WOMEN の開幕戦をタイで開催するということが

- クラブシーズンというものが決まっており、開幕週に実施をするよう調整している。タイでの試合も含め、2026-27シーズンのカーディングは6月の理事会で決定する予定。

Q. 収入見込み等について

- チケット単価が高いわけではない。ただ、熱い応援をしていただける方も多いですし、日本国内に進出しているタイの企業やタイ企業のパートナーシップをどれだけ獲得できるかが 1 つ重要になる。また、今後も継続的に開催することによってより注目度を高めていき、SV リーグの放映権の購入等に興味を示してくれる企業が出てきてくれると嬉しい。

Q. 現地の方にも来てもらえるために

- 駐タイ日本大使館やタイのバレーボール協会などともコミュニケーションを図りつつある。5 月末には出場クラブと一緒に挨拶、アリーナの視察に行く予定。簡単だとは思っていないが、何か踏み出さないといけない。MEN 主体で 3 シーズンプレシーズンマッチをやってきた経験も踏まえ実施していく。

Q. 収益の行き先はどうなるのか

- 収益は SV リーグ側に入るが、ホーム扱いとなるクラブに出場料を支払い、アウェーのクラブに関して宿泊はクラブ負担、航空券代はリーグで負担というような形で考えている。ただ、詳細についてはこれから各クラブと調整をする。

SAGA 久光、刈谷、大阪 B はそれぞれ責任企業の支社や関連法人などがタイにもあるため、例えばスポンサーしていただけるのであれば(クラブに)手数料をお支払いするという事も考えている。

Q. 昨シーズンに比べ、選手からファンやパートナーへの感謝の気持ちを述べる機会が多くなったと感じているが、それに関してどう感じているか

- 2024-25 シーズンの開幕戦の際に、西田有志選手、高橋藍選手が登壇してスピーチをしたときに「大同生命 SV.LEAGUE」と発言していた。私自身も事あるごとにファン、来場してくれた方々、グッズを買ってくれた方々への感謝やパートナーの方々への感謝、アリーナを優先的に貸している自治体、施設の方々への感謝、記事等にして世間へ発信してくれているメディアの方々への感謝、審判やスタッフへの感謝の気持ちをということは開幕前や選手とお会いする時には常に言うようにしている。その効果かどうかは分からないが、そういった意識を持ってきており、その中でも特に西田選手、高橋選手が先頭に立って発信してくれていることはとても良い競技、リーグだと思っている。

Q. 来シーズン、SV リーグ 3 期目となるが勝負の年になるのでは

- ファンの方があっての SV リーグである。オフシーズンにも選手たちと対話会を実施する予定だが、選手たちにもきちんと伝える。高橋選手がいたからファンが増えたというのは実際あると思うが、それだけ(がファンが増えた理由)と思われたら選手自身も私自身も悔しいという思いがある。そのために、ファンやパートナーが喜ぶことを徹底的にやっていく必要がある。選手が発信する力は自身が思っている以上に影響力が大きいということは常々伝えている。

Q. 来シーズン、B.PREMIER は平日開催を増加するが、どんな影響が起こり得るのか

- 現状、B リーグは金曜日・日曜日の開催が多いと認識している。そうすると土曜日にアリーナが空いてしまうと悩みを持っているということは聞いている。そのため土曜日に SV リーグを開催しませんかという話がある。例えば、金曜日に B リーグ、土曜日に SV リーグ、日曜日に両方開催というような方法を受け入れてくださるところもある。ただ、会場の転換などを勘案して、木曜日・土曜日に SV リーグ、金曜日・日曜日に B リーグでやりませんかというような話もあるので、そういった面で影響は出ている。

Q. 節は連日で実施しないといけないのか

- 原則は連日となっている。それは審判の手配、手当等の問題、遠征費の問題などが要因。解消するためにはリーグをもっと大きくし、投資できる環境を作っていかなければならない。とはいえ、現状個別に理事会承認を得れば飛び石開催も開催の余地がある。ただそうするとアウェークラブのコスト等の負担がかかる。

Q. 試合数について

- 2026-27 シーズンは WOMEN38 試合、MEN44 試合というのは以前決めた通り。今シーズンは実行委員会でも理事会でも試合数を見直してほしいという話は 1 度も出てきていない。チャンピオンシップファイナルの 3 連戦についても海外選手からはオリンピックなど大きな国際大会は連日開催が当たり前だから特に違和感はないであったり、その方がコンディションよくできるなどの話も出ている。また、レギュラーシーズンに関しても試合数を減らすと収入が減ってしまうという話もある。

以上